

「蠶母要覽」(宝永二年 1705) 読み下し文目次

読み下し 榎本祐嗣(元信州大学繊維学部教授)

協力 前澤 健(長野県立歴史館文献史料課)

蠶母要覽序(漢文)

蠶母要覽序(和文)

目録

- 一 蚕養様の事
- 一 二度蚕養様の事
- 一 繰り様の事
- 一 綿掛様の事
- 一 蚕種取様の事 并置様の事
- 一 桑の木仕立様の事

注 目録にある以下の項の本文はありません。

- 一 蚕桑の補ふなる考の事
- 一 唐乃書に(い)てし蚕飼の器の図の事
- 一 農桑乃事
- 一 養蚕弁論の事

## 蠶母要覽序

漢食貨志曰嘉穀布帛二者生民之本興自神農之世  
□云上世衣鳥獸之皮其後人多獸少事或窮乏故以  
絲麻布帛制衣裳也蠶事之所從來□不亦遠□夫農  
桑者天下之本務古今之大典也二者豈可一日偏廢  
也哉然

本邦諸品農莫不務而蚕則或飼或不飼

不飼者蓋以不知其法也□是諸州嘉穀有餘而絹帛  
不足士太夫之家皆□□而彼民間七十者卒不獲  
暖衣至於□寡孤独又安知其无凍而至死者□嗚呼  
傷矣有人姓武富氏多年私思之而不措 □就明蠶  
事者乞求其法參之干

本邦中華養蚕之書更互演繹以作一書其文皆難国  
字其語不忌□□欲愚夫婦

之易曉也彙為三卷名曰蠶母要覽其志无他只希望  
諸州之民□此以知其法必皆興農并務之□矣可謂  
仁人之徒也且觀其為書以教戒婦女者尤為周審精

密是特余之所取也書成遠求序千余余深其志即筆  
其趣□卷端者如此武富氏名咸亮雅嗜聖賢之學肥  
之前州佐嘉郡人也

宝永乙酉八月穀日

洛西散人伊蒿子□□叙

## 蠶母要覽序

「夫国の本天下の本人の至極の宝と云うものは衣と食となり人有此の二ツにて命をたもつものなれば食いものの備へはいふにや及ぶ諸人家に蚕を養て糸により綿になし衣類乃備へせずしてハ叶ハぬ事なりされば旧は山陰道山陽道南海道西海道の国にも多く養蚕し糸綿絹紬乃出来し事東海道東山道北陸道の国にも均しかりしと見エ侍りしがいつの此より

廃れて鮮くハなりしや唐より絹糸渡来を以て此業大形と思ひ無て叶ハぬ事を知らざるならむと是を広め見たく先試ミにわが婦娘子ともに飼せ侍る事に此業徧（ママ）く廣り諸人の家々になす事に成なば民の竈の賑ひに成ぬべし、とりハけ老を養ひ幼を育む世渡の業なき者の為によき事なるべし富栄ふる人貴き人の家になし給ふ共いやしき事にあらざるべし千早振神代にも蚕と桑とを生じ忝も天照太神方織神衣居斎服殿給ふと云るを縁にて倭姫命伊勢の国雲手の川上にお

ゐて機殿を立て織

神の遺風を継ぎ給ひます（く）其後廣まれるなり大唐国にもふるき昔の代ハきる物なくして鳥の羽をつらね獸の皮を着侍るに黄帝の後乃西陵氏蚕を養初て衣装になし給ふより代々の帝の後躬ら桑の葉を執て蚕し諸（く）婦女にも養しめ禁て身の飾をもなさしめず線□（はり）し織紡の事をも省て蚕のことをのミ勸是に力を尽さしめ給ふとぞ然るに下部のものとしてせざるべけんやすべて女ハ貴きも賤しきも養蚕し繰る事を勤の業としふかく敬てすべき事なるハ天神地紙を祀る祭服をなし礼義乃

晴衣を作りて君に衣せをいらせ夫にきせ又父母旧男姑にきせて老乃身を暖め忠孝の具へにとるも乃なれば糸の筋（く）に辛苦し其糸其織物美くせずんハ有べからず先聖王の人を仁（あわれ）ミ給ふの政も食を足しめ衣服を足しむるを第一とし五畝の宅これに樹るに桑を以てする事を教

へ給ふ殊更旧有し事なれば今民の居屋敷に有て  
助ともらなざる木ハ剪除き桑の木多く植立度も  
の也加賀越前美濃尾張近江上野の国など有今に  
をいて居屋敷よりはしめ野に山に桑をうへ、田  
畠の際にも

植蓄て多く蚕を飼よしを聞侍り、其事を委く知  
らまほしくかしこの国に云遣して蚕飼様乃次第  
居とにくりやう綿に掛様桑の木の仕立まで習ひ  
とり、又糸繭の種をも求めて養試しにいよいよ  
能業也、是故に望ミらむ人にハ見せ知しめんが  
為に尋聞し事共を書記し又唐の書をもあら(く)  
考へ其補になる事ハ書加へ凶画を副へ此事に付  
て婦女の心得へき事をも加へて以て蚕母要覧と  
号す蚕ハ神虫にて天性自然に糸を吐て人間に衣  
被す是人の女の繅り紡て親にきするが如し故に  
蚕を女兒を云蚕

を飼婦を蚕母と云ゆえんなり惟蚕母の巧者なる  
と不巧なるによつて糸のよしあしも多少も有

もの也是又人の親の娘の子をそたつるに能そだ  
てよく教へ習す時有其娘身強くして女乃取作を  
よく志らざるときハ其子弱く無能なるが如しよ  
くよく其業精く熟し知ずんハ

あるべからす是に因て楊泉が物理論に云るハ民  
を養ふ事蚕母の蚕を養がごとくすへし其用あに  
糸のミならんやと云り是民の父母たるの心なり  
閨の内なる女の業を見て汎く国天下の民を養ふ  
事を云る君子ハ義に喩るとハ

これこの謂か蚕飼事も始ハ物むさくおそろしげ  
なるようにて養事煩しく思ふ人も有侍れとも飼  
馴て後ハいとあいらしき事多く面白なりて厭ふ  
事も無なるものと見えし況や民をや誠に人の上  
たらん人民の養を蚕母の養蚕するが如くならバ  
民其上を仰き慕ふ事嬰兒の親を思ふが如くし百  
姓ハおほんとからと云の名にしたふ事多く楊泉  
が其用あに糸のミならんやと云へるに合るべし  
余がいふ取ハ糸を取の事といへどももとより食  
足国豊なるに此業廣りて隆盛んに成衣食共に満

足五十の者□を衣肉

を食唐虞三代の民たらん事珍重なるへしと云□  
(しかり)

元禄壬午夏六月吉日肥州佐嘉大宝武富咸亮序  
す

目録

一 蚕養様の事 并繭作らやうの事 蚕嫌物好

ミ物の事

一 二度蚕養様の事

一 繰り様の事

一 綿掛様の事

一 蚕種取様の事 并置様の事

一 桑の木仕立様の事

一 蚕桑の補ふなる考の事

一 唐乃書に(い)てし蚕飼の器の図の事

一 農桑乃事

一 養蚕弁論の事



## 蠶母要覽卷

### 蠶養様の事

一蚕種の紙にうミ付置たるが生出るを加へるといふなり春の土用に入ばやがて帰り出るものなり暖かなる年ハ土用の前にも帰り出る事有なり蚕かへり出し時の仕様ハ其種紙を伸て桑の花をもミかけ又ハ若葉を細かにきさミふりかけ置バ加へり出し蚕皆桑にそひ付なりそれを小箱の蓋か小櫃のふたか或ハ重箱たくみの器の深さ二三寸有物に紙を敷鳥乃

羽にてそ路（く）掃落すなり直にはき落すときハ鳥の羽といえともいたむゆへ唐の書などにハ直に掃事殊外にきらへ侍なり又多くかへり出し時ハ紙を志きたる器に刻ミ葉を入置種紙かへり出し蚕の有方を下になし其きさミ葉におほひ置ば桑の香を聞て蚕皆桑に取付なり其時又刻ミ葉を多くくれて器の上に匂ひ香などなき衣類を打おほひ風の入ぬやうなしあため置なり

其国其所により返出る前方の仕様ありそれハ桑の

木のめもめくミ出、土用にも入る比しげ（く）  
見れば蚕種の色かハリ少赤くなりはしめハ□子  
つふほとなるが其時ハ芥子つぶほどばかりに成  
なりそれを別の紙にて包ミ其上衣類にて包ミ置  
ぞ又色かわりて早く帰り出なり

又種紙を衣類か又ハふるしき類の物に包ミ戸棚  
の内に入置火鉢に火を埋ミほつこりと有ほどに  
し其棚の内に入暖る仕様も有、尤つよくあたた  
むる事あしく

又種紙少きハ何ぞに包ミ人の背に入置たるハ一  
（ひとしほ）入に

よし腹の方に入たるハ物にふれやすく宜らず  
種紙そのまま置て自らかへり出るを待ても帰り  
出る時分にハ出るものなるに右のことく手六ヶ  
敷する事ハ一度にぎツと早く出されば後に起休  
といふ事有も遅し速し有、又老て繭作に遅速有  
てあしきゆへなり

付たり種紙を前方見る時、色かハリ早帰さうに見へ侍れ共桑の芽遅く出る時ハ其種紙を土蔵の内の板の間か又ハ畳の下になと入置少冷す時ハ遅く帰るものなり

### 下蠶の凶

蚕帰り出る三日四日間に皆出るなり其日その日に出たるを別々に入置一番蚕、二番蚕、三番蚕など云なり又一番の子二番の子とも云

始め帰り出て黒き間を□子と云蟻子と云毛振るゐとも云此蟻子の時ハなるほど志げしげ桑をくれたるよし中巻に委く記し侍る

桑の葉も花も老たるハあし葉ハなるほど細かに刻ミ与ふるなり手をよく洗ひ浄くしてする也桑くるゝ時蚕をそろそろ鳥の羽にてひろぐる也

### 銀蠶の凶

寝起と云事四度有起休とも云又居起とも云休むをよとミとも云是らハ所によりて其名かハるなり寝（いぬ）るの休むのと云事きねをねきかゆ

るがゆへ煩ひ悩ミ居て桑をもてはずゐるなり  
蚕ハ上臈むしにて上づかたの人の姫となといふ  
にひとしくやさしき虫ゆへ飼所にてやむの煩  
ふのなと云へばそれを忘れてきげんあしきゆへ忌  
事をいふよしきため乃詞也 此起休によつて桑  
の指引するなり 是にてよしあし有ものなり 唐  
の書にハ眠起と云 又起俯(おきふす)とも云 蚕  
経に眠起斎し加らざれハ糸少しと云り

第一度目を志ちの休と云又一どゐとも云しけめ  
とまりとも云しぢ子ハ初めかへり出し時より凡  
三四日志て白くなるなり頭より白くなるゆへ髪  
するとも云也此休ミの時ハ頭腫て桑も食す動か  
ず頭をあげ居なり此時ハ桑を与へぬなり其間二  
夜二日ばかりなり休む間ハ動くかさず物静かに  
して置なり起揃ふまでハ桑与へずして置といへ  
とも間に早く起るも有に桑少くれたるもよし

#### 一眠の凶

起ると云ハ、そろそろ起動て桑くひたがるやう

すゆへ桑を与ふるなり、其時に刻ミ桑乃枯たる  
にかへれゐる蚕出るなり、皆出て蠹き見ゆる時  
桑多くふりかけてくるるなり見計て一日に四五  
度づつくるるなり、此時より有（？）蚕入し器  
におほひ置し衣類ハ取除く也

起動て二日ばかりすきてこじりかへをするなり、  
こざらへともいふ也、是ハ枯たる桑の葉と蚕沙  
まし里有を取すて清くするなり此仕様は蚕を別  
の人物にうつしかへ桑に取付ゐる蚕

を少づつ分つ並べ桑新しくくるゝなり

起休して後の休ミにうつる間凡五六日斗也但時  
の寒さ暖さ人の飼様に遅速少ハ有なり虫の小さ  
間ハやいとはしのごとくなるさきとがりたる箸  
にて傷ぬやうにあつふなり、少大りたる時ハ手  
にてあつふなり手 洗て るなり

第二度目をたけの休と云高休とも云二ど居とも  
いふ是も志ちの休ミに同し起あがる時桑くるし  
も前のことし、こしり加へするも前に同し二日

間ばかりにしたるよし

第三度目をふなる休と云三眠とも云たけの休ミに同じ休ミそろハぬ間ハ桑少つつくれ置事同前なり

やすミの時桑の葉多くふりかけ与ふれぞ虫葉の下に成て重きにおされ又は蒸れて色あしくなりよハるものなり、かやうの事によく気を付べきなり

### 三眠の図

三起志て桑食 かる時此起よりハ初め一度刻ミ葉を与へ其後ハ桑の葉其まゝくるる也

葉に少し裂かた付たるよし若枝のめたちハ枝とものに葉に雑へくるるなり日の中六七度も見斗てくれ又別器に移し広るなりこさらへも前に同じ士農必用に云蚕大小成多なる時ハ必分ち迂なり蚕ハ柔軟のものにて人の手に触弄ぶの事をきらハざるゆえ手に軽く取て分つと云り

務本新書に云箔の上に蚕置事間とをに置

たるよし間近く置ば風氣通せずして痛むや又暖  
め置たるを涼ふせんとして倉卒に窓を開き門を開  
けて風にあひ紅彊と成 風に阿たりて死するを  
云  
窓を開も漸々に開と云りこさらへ二三度も其上  
毛したるよし暖気の時分しけしげせざれば蚕痛  
むなり  
むしわつらひて色あしくなるををもかハリす  
ると云又色のよくなるをおもなをりするといふ  
と蚕母のことばつかひ慎むべし

#### 分箔の図

第四度目をにハの起休と云又大眠起とも云ふる  
乃起休に同し休ミ中桑くれぬ事も前に同し此起  
よりハ桑なるほど多くしけ(く)くるるなりこ  
さらへも前乃如し其度毎に別の入物に 迂し廣  
めて桑多く与ふるなり竹箔葦箔むしろもよし多  
く養時は(?) 棚を作りて上置なり桑しき与ふ  
る事日の中に八九度もくれいつれ見計て食次第

に其上もくれ又夜もくれ桑しば らくも不足な  
らぬようにするなり此にハの起の時桑不足なれ  
ば繭うすく小し此時ハふる葉がよし

若葉ハ蚕もこのます食ずしてをくも有也ゑたく  
きともに折ならべてくる（く）よし枝茎をも食  
ふ どの器量のむしハ糸つよく糸のぎんもよき  
ものなり油断なく夜白に桑多くる（く）事專一  
にすべし

韓氏直説に云大眠起の後ハ与ふ事十五頓はかり  
すべ頓ハ食する時を云 桑多ければ糸 多し  
桑の葉不足なれば糸少しと云り

### 大起の凶

是よりやがてひきり口と云に成なり蚕ひきり口  
と云うハ繭作りきハになり、蚕の咽と腹とすき  
有たる事なりやかて是に成んとてハ蚕殊外大き  
に成桑弥多食ふなり天気能時分ハ猶桑多く食ふ  
ものなり夜も益多桑与ふるなり天気悪敷時ハ多  
食ぬ事も有時に臨て見斗入べし にハ乃起より



五六七日ほとにてひきるなり、もし桑不足なる  
か又ハ雨しげく降て桑多食ぬ時ハ八九日にもひ  
きるや

ひきりたる蚕ハ大きになり長く又つまりのんと  
も

腹もすきわたり色赤きひになるなり是をよく見  
分て拾ひ取折き丸盆類の物に入置て寓床に迂す  
なり寓床ハ繭張らするものなり此ひきりの見様  
大形にしていまた老からぬひきりを拾ひとれは  
繭薄して小し又ひきりの過るハ百虫というにな  
りて蚕作らすつくりても薄し蠶の咽の下にふし  
有ニふし半三ふしほとすきたる時あげたるよし  
四つのふし皆すくまでハ遅し此時精を出し間な  
く油断なく見て撰び取なりひきりに成たる蚕は  
大かた入たる竹簾よし 箔席等の端による

ものなりいまたひきりの見分かたく不功名なる  
時は桑をくれ置もよし

百虫に成たるハ一ツつ紙に入紙の口を捻り結て置けば蚕  
作るなり

## 捉績の凶

繭作せやうハ籠や櫃乃蓋の類になたねから黍から又グミの木の枝柴乃枯たるなどを入並べそれにひきりたる蚕をちらし置く紙かわらか少おほひ置たるよし此繭張せやうハ国（く）所（く）乃仕なれにて少づつ乃かハリ有萩薄豆加ら類のものにもするなりわらつともよし但何にても奇簾なる物にあらざれど繭乃色悪くなるなり塵埃乃付ぬやうにすべし

寓床小さくせまきに蚕多置時ハ蚕一所に多有故一ツ入にハはらずして二ツ三ツ或ハ四ツ五ツ六ツもは入てはりだんご蚕となり又ハ長くさほ蚕なというになりて悪し糸になりてふし多く糸にもたちかたし又綿にもあし是故に寓床のこしらへ功者不功者有なり此心得をしてきまいなるわらにてつとのやうになとこしらへ風のあたらぬ静かなる所につるし置たるよし風にて動き驚ハ蚕あしし

ひきりもし見分かたく繭作らざるも有んかと思ふ時ハ桑の葉少繭作らせ物の中に所（く）にちらし置たるもよし又長持のふた戸板の如き

もの筵などにてても一尺ばかり間にはらせ物を並べ其間をきたる所に蚕のひきりたるを入置桑乃葉与へ置時をのれ（く）と暖々張物に□付てはる也初てかふものハ此仕様よかるべし

### 上簇の図

蚕の繭作りて四日ほど過れば繭一ツ（く）扱放て取なり

繭を擇ぶ事糸繭と綿繭とハ元来種替れり種繭にするハ糸繭も綿繭も其中のなり形よきを撰てむし一ツ入籠て作れる眉を出るなり干さずして其まま置なり

農桑要旨に云繭ハ必雌繭と雄繭と相半す簇の中に在に上に在ハ雄繭なり下に在ハ多くハ雌繭なりと云り又陳志弘の云へるハ雄繭ハ尖りの方細く緊くして

小し雌繭ハ円くして慢く厚ふして大きやと云へり  
桑蠶直説に云繭の長くして□白ハ細糸の繭なり  
繭大にして晦色に青きハ粗糸乃繭と云へり  
糸にくる繭ハなり形のよきを撰てするや虫一ツ  
入たるを上とし二ツ入たるを中とし三ツ四ツ入  
たるを下とす此上多く入たるハ糸にハなりかた  
し綿繭も虫一ツ入たるハ糸にてくるもよし

### 擇繭の図

上繭の総称を絹子繭と云其内小ぐミ大ぐミかや  
なり白玉かなまろなと、云の分れあり又黄色の  
繭に金目ぬき小まるまゆなと（く）云有其外に  
品多し名は所によりてかわるなり

繭を殺す事やがて糸にくり綿にかくるは二三日  
干なり干さずしてもよし。又急にせぬハよく繭  
を日に干なり能は干ざれば蛾に成て出るなりよ  
く乾たるハ繭にあたり見るに堅き也やハラかな  
るハ干の足ぬ故なりひよく（く）干され

ず久しく置に虫出来又くち損する事有也

繭ほす事一ツならべに「してほすなり二ツも三ツも重りたるハ下に有繭乾かねて虫くひ出るなり虫出たるハ穴有ゆへ穴繭と云て糸にハならず綿にならてハ成らざるなり

又天氣悪敷時繭を日に干る成かたき時は茶をあぶるがことくほいろにてあぶりたるよし繭に色つかぬやうに少あぶり虫殺すまてにすべし

糸繭もなり形悪敷繰る事成りかたきは干置て綿に掛なり虫八ツまでは入籠りて繭作るも有と唐の書にも見えし

農桑直説に云生繭にて即ち繰るを上とす人の手に殺すに及はず慢々と繰るは繭を殺すの法三ツ有一ツに曰日に□す二にハ塩に潤す三に曰籠に入て蒸なり日に□ハ損ず籠に入蒸たるよし塩に潤すも穏なりと云へり

三才図絵に塩に潤すの法出たり大きなる

甕を地上に埋ミ、其甕の中の底に竹箆を敷其上に大きな桐の葉を鋪て又其上に繭を一重 十斤斗敷廣げ其上に又桐乃葉を敷きおほひ塩二両ほど振散し又桐の葉を鋪て繭を入れ如此重ね（く）して上り甕の口に蓋をおほひ上を泥を以塗封し置七日の後取出し繰ると云へり

又云籠に入蒸ハ繭を籠に入る其厚さ指三ツぶせほとにして蒸すなり其熱さは内の繭を取に熱くして手を引加減を

宜とす蒸し足らざる時ハ蛾出てあしし蒸過す時ハ糸軟也と云へり

塩に潤す事久しく繰らず綿に掛ずして置にはいかかや有らん糸も綿もよハかるべし其心得も入へきなり

蚕のきらひ禁するもの有事きらひ物の第一は水気有桑の葉なり故に雨の中なとハ布や木綿乃ふきものにて水気を拭ひ取て食するなり大分にて拭ふ事成かたき時ハ薄く廣げ置風に吹乾せてくるゝなり礼記に

も葉を□り戻して以てこれに食と云り

一説に水氣有桑ハ粃糠を振ひ掛置後は糠をふるひ落し桑斗食するなり

木露か（く）りの桑の葉虫の付葉色悪敷も嫌又萬匂ひよく薫する物沈香麝香伽羅の香の類又汚ハしく臭のあしきも禁ず魚の焼□（？）取分うなぎの焼□（？）たはこ煙こせう南風雷鉄砲の音此外萬響の高きもの又女のひを嫌但家内乃人はよし

鼠の食雀の食蟻の付ものなり此用心も

入なり

居家必用に云蚕の忌禁出る物ハ蟻子の時掃除して塵埃を懸る事、高声鳴騒ぐ声月に足ぬ産婦酒酔五辛の類酒に酔たる人乃桑の葉刻ミ与ふる事此外前に同じ

蚕乃好物は蓬乃葉なり、きげんあしく痛ミたる時は必ずよもきをきささミ、桑の葉にましへて置たるよし、入物乃脇に入置なり、桑の葉を刻む度毎に、よもきの葉にて切刀桑礎も拭ひたるよ

しとなり、



## 二度蚕飼様の事

一 二度蚕も養様春乃時は一度蚕に同し、夏の二度目乃時は寝起早く、およそ十八九日斗に老て繭作るゆへなる程桑を多く油断なく志けしけ与へてなくなり、或時は此日数乃前にも老る事有又廿四五日其上の日数経て老る事も有時の寒暖と飼様とによすなり総て春繭より夏繭は劣れるものなり、養事始

## 終涼きに宜

唐乃書にハ原蚕と云、晩蚕と云、夏蚕と云、二度蚕とも云り周礼には是を禁ぜられたり其ゆへいかんとなれど、二度糸を取事利あらさるには非ずといへとも、王法に禁する事、一 歳に再ひ繭を湯に入る（く）に悪びざる仁愛の心なり、又農の時を妨げ、又桑乃木いたミ損し次の年遅く葉も出□宜しからぬ故なり

## 繭り様の事

一 繭を糸なりくるにハ前方の上皮の糸毛のやうなるものを剥除き置て常の鉄鍋にても釜にてもふるくして金気の出ざる一升たき二升たきほとなるに水を七八分入焼立てて湯を沸し其湯の沸しを見て繭を一二合つつ入て煮立湯じみする時竹の丸箸のさきとりたるにてかき回せば口の云て糸口の箸に掛るを篋にくり取るなり餘煮立時ハ糸口立かぬるもの也糸のほとハ望ミ次第、繭の糸筋廿三十筋斗

其上にても見計てわくにくり取なり、糸筋細ければ糸の色もよくぎんもよし、然ども後にくり分る時糸口失やすく切やすし其人の功によるべし

韓氏直説に云釜は口乃径一尺以下を要（よき）と次繭を下し入る（く）事少きほと糸よし頻（しきり）に多く入るる時ハ煮過して糸の色あしく糸も少し釜は砂鍋銅鍋よし鉄釜に比（くらぶ）

れハ糸の色光亮（ほがらか）なりと云り

繭多く繰るにハ竈を釜一ツすゑになりたるよし繭少くるハ炉や火鉢に五徳鉄輪置てもよし

糸口はしに掛らすいたつらに有ハ煮過たるゆへか又ハ繭若き故にも有へし、それハすくひ上て水に冷し置後綿に掛てよし、又湯の色黒ミ又は赤ミ出る事有ハ鍋釜の金気出てか又繭のあく気出での事なるゆへ糸の色あしくなるなり水を替て幾度も煮立念を入れてするほどよし

又念を入れてするハ、前に云をく湯を沸し繭を入れて煮立湯じミする時すくひあけ桶に水を入置それに繭を移し入てひやし置鍋釜の本の湯ハ捨てわかし替冷し置たる繭を多も少も好

次第に入て簍にくり取るなり

繭を煮て杵に糸くり取事、手わくに手にて繰りてハ墓行ぬゆえ杵台に掛てくりたるよし、又鍋釜より直に簍にくる時ハ鍋釜のふちに糸かゝて

あしく、又糸に繭虫付て上ることも有糸も立かね彼是宜しからぬゆへに鍋にても釜にても篋台との間に長さ三四尺の竹を立其竹の上に横に竹の輪をさし其輪に糸をかけ纏りたるよし又輪にハせずして立竹の上に横に曲りたる竹を指すか又ハ波かり鍵を結び付てもよし立竹にも下

に木の台を仕たるよし

三才図絵にハ纏り台の立木の上に大きな錢を一文結び付置その錢の目に糸を通し纏ると有此外纏りやう色々有侍れども煩し只仕易きを宜しとす

繭を簇より放ち取りて程なく纏る時ハ糸乃色よくぎんもよし程過てハ糸口も立かねて悪し但大分ハ少間（しばらく）に纏る事成かたき時はよく干置か蒸て干置かして後くるなりいろいろ事志けきものなる事古今集の歌

にも

夏引の手引の糸を繰り返しこと繁くとも絶え  
んと思ふな (注：古今集卷第十四にある詠み  
人知らずの歌)

此歌は或人申す、あめのミかと近江の采女に給  
ひける御製の返しに読て奉りけるとなむ、又糸  
ハ念を入させれば、糸のふし多て悪し、紀の貫  
之の歌

わが恋はしづ乃しけ糸くりかねて いかなる  
ぬしに思ひたツらん

### 鍊絲の図

纏る事ひたと久しくくるに、手わくの小さにて  
は手却て草臥なる有ゆへ、篋をちと大にし長さ  
六寸余横四寸四五分に木をつよくこしらえ中に  
柄さし所の穴を仕又片脇にも穴を仕二所に穴を  
穿ち置なり其子細ハ初め糸をくり掛る時ハ中の  
穴に柄をさして片拍子にしてくりかたたきよう  
なれども片拍子に廻る間にいつとなく手の休ミ

となり月日累にても草臥ぬものなり、中の穴に柄をさしてハ当分ハ縲り安け

れとも拍子揃ふを以て、月日久しく縲る時は、草臥と成ものなりかかる事ハ其道の習ひ有ものとぞ見えし、

唐より渡る白糸を見れば篋体外大きにし、取くづしに作り置いて糸ハ取と見えし縲車の図とも枠大小見えたり

糸をくり分或ハ糸をより絹に織るに経緯の糸そろへするなとな、小き手篋数多く入なり、四角の柱木の長さ凡四寸七八分にして横さしわたし三寸七八分斗に仕たるよし

### 中篋 手篋の図

### 絡絲の図

## 綿掛様の事

一 綿掛るハ繭のゑらひなく仕るといへとも繭の能ハ綿もよきゆへ上綿をかくるにハ、親を撰びたるよし、是もミな上皮の糸毛のやうなるを剥除き置てするなり、糸繭も糸にならぬハ綿に掛るなり蛾食破ていてたるも穴繭もよし蛾いてたる繭々染物とも有て色あしきゆへによく洗てする也、扱綿掛るハ早稲のわらの灰のあく蓬のあく粟からのあくもよし、又蚕らしりがへしたる

桑の枝葉と蚕沙とを棄ず集置て灰に焼て灰汁にたれたるもよし其あくを大釜入て沸し立繭を布木綿の袋に入口を結び右の釜に入てよく煮なり、能煮たる時繭袋を取挙て水にてよく洗ひ絞り置て一ツづつ繭口を見て廣げ手にも掛或ハ木杓子やうのものにも掛或ハ盤折敷類の物にも掛るなり、  
よき厚さならんと思ふ時迹して白水に浸して洗

て灰汁気を去しほふりあけ竹の棹にかけ干すな  
り

綿を掛るも繭はらせ物より蚕を放ちといて程な  
くかくる時ハ色よし新綿の事為家の歌に

するがなる富士の桑子の新綿ハ高ねの雪乃色に  
似るらし

又筑紫の綿も名物に聞え侍るハ夫木和歌集に沙  
弥満誓の歌

しらぬひの筑紫乃綿は身につけていましハ着ね  
どあたたかに見ゆ

題なしの図



蚕種取様の事 并置様の事

一 種にする繭ハ前に云ことなく繭をはらせ物より放ち取の時なり形よ、蚕一ツ入籠りたるを撰び取かた端を糸にて連ね鼠の寄らぬ所につるし置けば十二三日も置く頃、蛾の蝶に成出るなり、その蛾大きなハ牝蛾小きハ牡蛾なり、それを取て器に紙を敷て入牝と牡と並べ置時交尾なり、朝五時分につるミたるハ昼の九ツ半八ツ初時分にも引離し、又四ツ時分に

つるミたるハ、八ツ半七ツ時分にも引はなすなり

離時分に成たるハ離やすし、又離かぬるハ未ければなり、其はなれたる牡蛾ハ別器に取捨置、牝蛾を別の厚紙の裏に移し並置時、暖（く）子を生付るなり

紙の裏に置事ハ、紙表ハ滑かなる故後に子種離なる（く）も有が為なり、又厚紙を用る事ハ、冬寒の水に浸する有故なり、紙の地堅く厚ほどよし、

士農必用に云、蚕を育るの法ハ、種を撰ふ  
始るゆへに種蚕を取るハ色白く厚く堅くして、  
実したるを撰ひ取と云り、  
又云蛾出る第一日のハ苗蛾と云是ハ用ず、次の  
日以後出るものを取て種にするなり、  
末後に出るを末蛾と云是も用いずと云り、

### 蚕蛾の凶

種紙を蓄へ置事ハ、ゆるく巻て紙の袋に入上下  
をあけ糸にてつり緒をつけてつるし置なり、煙  
のかからぬ所蚊の付ぬ所鼠の寄ぬ所を撰べし  
務本新書に云種紙を蚕連と云是をつるし置糸麻  
の糸の縄をすれば種生せず、麻の類を禁ずるも  
のなりと云り、  
礼記に云三宮の夫人の後なる者を蚕室に入、種  
を捧て川に浴すと云り、蚕書毎に此事出たり、  
是ハ十一月の冬至か、十二月八日

の種紙を水に一時ほど浸し置、又引上て日陰に

て課乾かし本のこどくつるし置なり、其ゆへハ蚕連ハキハめて寒すをよしとす、右のこどくにするときハ種全くして明る春發生のとき卵よく折け開てむし強かためなり、水あまり深く時過て久けれど種死して生せず、又水余り浅くよく浸ぬも甲斐なしと云り、浴する日、冬至にすと云、又春三月蚕かへり出るまへかたにすと云の事も有侍れとも、十二月八日にすると云の説多

し此事上野の国にハするとなり加賀越前近江の国などにハせぬよしなり、余こころミに種紙を寒水にひたしてもをき、又其まくをきても見侍るに皆一度にかへり出てその勝劣ハしられず、しかれともかならずすべき事と見へ侍るハひたしたる種蚕のいたミ損せぬを以よき事ならんとハ知れ侍る寒国と暖国の心得も入へし。

## 浴蠶の凶

## 桑の木仕立様の事

一 桑を仕立てるハ榎を取て萌したるがよし桑の  
実のうよく熟したるを木灰にもミ合て実のしる  
を取て萌なり実すの（？）ままに蒔てハよく萌  
ぬなり先畠に地床をこしらへ野菜種を蒔植る地  
の如くし右揉たる桑種むら班なくまき其上に土  
を紙ひとへおほひしやうに土薄く おほひを  
土厚ければ萌出ぬものなり右の如くまきたる上  
にこもむしろへ重おほひをきて折〃見桑苗も  
そ

し時おほひ置たる物を取除なり、又わらすさを  
打て薄くかけ置雨のたゝかぬやうにしたるもよ  
し、其萌出し桑苗にこへをして培ひよく肥せば  
其秋ハ高さ一尺余に成なり、それを其冬の明る  
春の正月の二月のほりこきて別の所に移し、五  
寸六寸斗間に一本つつ横にふせて植土付の白ミ  
より上四尺五分ほとをきて刈なり然る時ハ其刈  
きハより枝茎おほく萌出るなり、それを肥しを  
くとき其秋ハ三四尺に成なり其冬か又ハ明る春

念を入れてよくこき、畑の端に埋糞をして植れば其秋ハ五六尺余にも成なり是を其次の春よりハ葉を摘梢をとめて蚕にお用る也、梢を切ハ人長斗に切て用ひ（く）するなり、其木の際に麦粟黍豆等の作り物するが宜しき故なり、又木高ければ葉もつミかたし、右のことくに仕立るときハ三年以後ハことの外盛長するなり、是ハ畑に仕立やうなり、又屋敷の脇、川岸、山林の辺に植て大木に仕立も、右のことくに仕立たる木を五本十本又ハ五十

本百本と植なり、いつれ湿気有所能盛る也、畑に植るも、別所にうゆるも、萌出しより二年の間ハ、枝葉すこしも取ぬがよく栄るなり、桑ハ其品多し、其中葉大きく丸く厚く、木の枝幹もうるハしくのひやかなる是 上とす蚕に用ひて糸多し、唐にてハ是を魯桑と云 榎少きものなり、又一色ハ木の枝幹小さく堅く見へ葉小さく薄く葉の吹切志けく深く菊の葉の し、是を下と次蚕に

用て糸少し是糸ハつよし、唐にて荊桑と云榎多  
きもの也

地平にやハうかなる所ハ二品共によし地堅く風  
雨の所や高き是山畑とにハ葉小く薄き荊桑宜し  
きゆへ是もひたすらに捨へきニハ阿らざるなり、  
畠に植て上にのびさるやうにし野菜もの作立る  
やうにするを唐にてハ地桑と云り、此仕様も  
品々有侍れとも、先ず木の根に生じたる小枝ハ  
剪さり、大きな枝幹をそだてこゑよく すれ  
ば葉大きに厚し根より二三尺間に有小枝ハ必き  
り捨たるがよし、雨の時土砂のかか

里たる葉ハ蚕に悪し、

付り接木さし木 とするもよしといへとも桑ハ  
生じやすきものゆへ実をもやしたが利益速かな  
り

汜勝之が書に云桑を種法ハ、五月に榎をとり、  
手にてもミ水にて洗ひ其子を陰乾しし、肥地に  
蒔種るなり、荒田乃久く耕さざるハ、尤よし、

種を蒔き下す事ハ黍と桑種と当分に合て畝毎に蒔なり、然時其桑と其黍と共に生するを其桑遠に有やうに引捨て糞

をよく仕置時、桑も黍も高く盛長する也、是を其秋利鎌を以て地摩に刈其刈茎の上に其まく置て干曝し乾燥てを待て風に順い火を放て焼て糞を仕置に春發生のとき桑よく生し茂るなり、是を次の年移し栽るなり、移さずてもよし、一畝の桑にて三箔の蚕を飼と云り、務本新書の説も同じ、

蚕桑の業を大分になさんと思ふものハ其土地を忽らび一反の地に桑七八百本も植たるよし、又

唐の書に八百歩四方の地に一步に一本つつ植へ一萬本の積りにうへたるよしとそ記せり

本朝にても古より桑を種立るハ並木に多く植しと見え侍るハ、為兼の歌に、

賤のめがつくり盛ふる桑原乃同しさまなる枝つつきかな

貫之の新桑繭の歌

今年生の新桑蚕のから衣 千代をかけてぞ祝ひ  
そめぬる

今年生まとよまれしハ梢をきりしよ里

出し□への枝葉にならんの惣て老木に成葉小く  
木うるハし加らざるハ大枝より引切たるよし、  
しかれハ□へ出て若やき葉大きに成なり、冬の  
中に切ハ痛むゆへ正月末二月始に切なり、

王禎が曰桑を栽るハ其地力の宜きに合ふ所を撰  
ひ、二月の中春分の前後乃い、十月を上の時と  
す春分の前後ハ発生に及ぶなり又十月ハ陽月と  
号し小春と云、木の気長發の月なり、

故に栽培て元気を養事宜

なり、桑は生し易きものといへども十一月生活  
せず、余月ハ可也と云り、

詩經湿桑の篇に云湿桑有阿其葉有難と云り、澤  
河岸谷際沼の辺いつれ湿気有所桑ハよく栄へ、  
葉色美しく黒く光澤有也、居家必用に云、桑の木  
の人の腕ほとに成たる時四五尺間に移し植其枝



さきさきに縄を付其縄に石を結ひつけて枝さきのたれきたるやうに志てを記たるよし、すぐへのびたるハ葉取かたしと云り、

又云、桑の木の下に□豆と小豆を作れハ桑栄るなり、此二品の豆ハ潤澤有て桑の為によしと云へり

詩經小弁篇云、維桑与梓必恭敬止 父 依母と云へり、言ハ古ハ必桑と梓とを植て子孫に遺せしゆへ、其木を子や孫の恭敬し重んし、愛する事父の如し、依て（？）親ミ懐しくおもう事母の如にし侍るとぞ、是に躬類せし事、万葉和歌集の歌に

足乳根乃母之其業桑尚 願者衣爾着常云物を

桑茶楮漆を四木と云、麻紅藍を三草と云事、千草万木の中にも勝て人の為に用をなして貴きもの。なればなり取分桑ハ其徳多し先人の命を保ツ蚕の糸綿を吐味に入、又桑茶桑染桑の杖桑火桶鞭にし、鞍にし弓にし、腰掛等にす其外諸道具にするにも美材なれば五穀に次てハ必ず桑を

植べきものなり、一たび植れば盛長し

永く家の助となる木ゆへ、古は家ことに桑をうへ、其外の雑木ハ剪去しと見えたり、大分蚕桑の業をなすものの利潤多きハ云にや及ぶ、蚕飼少づつ致し、其家内のぬひ糸引れた取との事にも年々の事家々の利益少なからず、もとより民家のものハ農業の暇くに桑を仕立置婦娘よりはしめ姥などの腰折仕事に備る事勿論の事なり殊に春土用に入比より三四十日間に事ものなれば農業の障りとなるものにもあらず、是故に

先王の仁政の教にも農桑を第一にしゆえんなり諸葛孔明給ふハ貧賤も移するあたハす、富貴も淫する事あたハざる大丈夫といふにも、成都に桑八百株を植薄田十五頃を子孫の衣食に備へ置れ、魯齋の許氏も衣食足らざる時ハ心動て身修ずと云て治世の論を書れたり、貨殖の心あらんは下りて□し、衣食足ばかりの備へ□有べきもの哉